

新代表（共同代表）5名による新体制スタート！

～森精一代表逝去に伴い～

「厚生会館のホール再開を求める会」では、2021年6月号の『広報やつしろ』に「八代市厚生会館ホール再開中止」が小さく掲載されて以来、様々な活動を行ってきました。その活動を牽引してきたのが、森精一代表でした。

厚生会館当時の設計や歴史を諳んじ、熱い思いで八代の文化の灯を絶やさないようにとどんなに厳しい状況が続いても、あらゆる手段を用いては、再開の手立てを前向きに探って参りました。しかし、志半ばで昨年12月末に森代表が急逝し、私たちはその信念を引き継ぐべく、新しい5名の共同代表のもと新体制のスタートを切りました。

地元、文化、教育、舞台芸術、建築など各分野に通暁した新代表は、それぞれの立場から厚生会館を失うことへの強い危機感を持ち、「待ったなし」の状況を乗り越えるべく、熱意と使命感、知恵と経験を持って取り組みます。

厚生会館ホール再開への道のりは大変険しい状況ですが、八代のため、八代の未来のために諦めることなく、「やれることは全てやる」という決意で、パワーアップした新体制で最善を尽くしてまいります。

～新代表（共同代表）よりご挨拶～



八代市の中心市街地文化ゾーンの核となる厚生会館

共同代表 丸山 久美子 [洋画家、八代市文化協会会長]

建築物としての価値と教育的価値を持つ厚生会館。建築界のレジェンドである芦原義信氏による設計で「外部空間論」という新たな建築思想を取り入れた、世界的に認められている建築物でもあります。

当時の市長・坂田道男氏により、“本物の文化芸術に触れることで八代市民格の向上”を目的として作られ、保育園のお遊戯会から、チェコフィルハーモニー交響楽団や日本フィルなど国内外の有名なオーケストラまでもを満足させる懐の深い劇場であり、多くの八代市民の文化的素養を育んできた場所です。

さらに、厚生会館は“中心市街地”の核として、今後も大きな役目を果たします。八代城址・お祭りでんでん館・博物館・松浜軒と繋がる歴史文化ゾーンは、市外からの観光客にとっても欠かせないエリア。ホールを再開することで人流が生まれ、周辺施設への相乗効果は計り知れません。

厚生会館のホール再開こそ、「八代の文化の未来を守る」ことだと考えています。



厚生会館は私にとって 音楽と接する原点

共同代表 木田 哲次
[本町4丁目の元酒店店主]

確か、厚生会館のオープン記念イベントだったと思います。当時、厚生会館のすぐ近くにある小学校の5年か6年だった私たちは、その舞台に立ち、合唱を披露しました。どんな歌を歌ったかはもう覚えていませんが、厚生会館とはこの時からの長い付き合いです。

中学生の時に『労音』の会員になると、厚生会館で年に何回もプロの演奏を聴くことができました。演奏会の日、子どもながらに身だしなみを整えてから、厚生会館に歩いて行ったものです。社会に出てから『合唱団からたち』に入り、約20年間活動しましたが、その演奏会の多くは厚生会館が会場でした。組曲「球磨川」をここで何度となく歌いました。自分と言うのも何ですが、心地よい音が響いていました。

「もし厚生会館がなかったら」と考えると、音楽との接点だけでなく、レベルの高い音楽を聴くということもなかっただろうな、と改めて思います。これが、「厚生会館を次の世代に残したい」と思う私の原点です。



八代市厚生会館について

共同代表 磯田 節子
[元熊本高等専門学校
建築デザイン工学科教授]

ほとんどの建築・都市の学生が、芦原義信の「外部空間の構成」について学びます。芦原氏の書籍『外部空間の構成』には、「建築から都市へ」という副題がついています。

芦原氏は、建築家として外部空間理論をいち早く示した人です。八代市厚生会館は1960年代独特の鉄筋コンクリート(RC)造の質の高い建築に加えて、芦原氏の外部空間理論の出発点になった建築です。

八代市の外部空間に着目すると、八代市厚生会館の外部空間を中心として、約400年前に竣工した堀を含む「八代城」の外部空間、ここは利休高弟の細川三斎ゆかりの地でもあります。そして松浜軒の美しい庭園、現代に飛んで、当時建築界をアツと驚かせた「未来の森ミュージアム」の建築を地中に埋めてしまった「緑のマウンド芝生空間」、そして「お祭りであそび館」の人の流れをつくりだす「みち空間」が連なります。

こんなに豊かな外部空間のある中心市街地は、わが国でもこの八代市だけでしょう。



人生の基礎を培う 格調高いホール

共同代表 佐藤 士郎
[元校長、八代美術協会会長]

教育現場にいた立場から、厚生会館のホールは八代市の教育にとって、非常に重要な文化施設と考えています。

かつて八代市は、すべての中学3年生を厚生会館ホールに招き、オーケストラ等の生演奏の迫力と感動を体験できる貴重な機会を提供していました。このホールでないと実感できない素晴らしい音響、重厚な建築物の雰囲気、普段はやんちゃな生徒たちも襟を正して聴き入るなど、フォーマルな鑑賞態度のTPOを自然と学んでいたといえます。

感動を誘う劇場文化に一度でも触れておくことは人生の幅を大きく広げることへ繋がります。それは豊かな常識を備えた社会人として、郷土のみならず世界に通用する優れた人材を八代から生み出すことになり得るのです。格調高い厚生会館ホールを失うことは、人生の基礎を培う八代の教育にとって大きな損失と考えます。



市民に愛されている 劇場の持つ温かさ

共同代表 甲斐田 栄
[舞踏家、熊本バレエ研究所教師]

熊本市在住の頃より、厚生会館の劇場としてのポテンシャルの高さは強く感じていました。その後、縁あって八代で生活するようになり、ありがたいことに腰を据えて厚生会館が私のバレエ活動の本拠地となりました。

以前、ドイツで開催された音楽祭や親善公演に参加した際に踊った劇場と同じ空気感を持つ厚生会館。その空気感とは、熊本市民会館や熊本県立劇場とも違う、ましてやハーモニーホールからも感じられない「市民に愛されている劇場」の持つ独特な温かさ。気軽に発表会などで利用でき、誰もが親しみを感じられる「良質」な地域密着型の劇場。音を体にいっぱい浴びる感覚で、子ども達が気持ちよく伸び伸びと踊り、ワンスロープの客席と舞台との一体感を得られる劇場は他にはありません。

共同代表として、舞踊家としての経験を活かし、ホール再開に向けてお役に立てればと思います。

【追悼】 前代表 森 精一氏を偲んで ～継承する想い～

昨年(2022年)12月31日、「八代市厚生会館のホール再開を求める会」森精一代表が死去しました。95歳でした。11月14日に開催された八代市との意見交換会に臨んだ後、体調を崩して入院するも、ソクラテスやミルの哲学書をメンバーに頼んで図書館から借りて読み込むなど、相変わらずの旺盛な学習意欲を発揮し、暮れに退院、年明けには通院治療も視界に入っていた矢先の急逝でした。

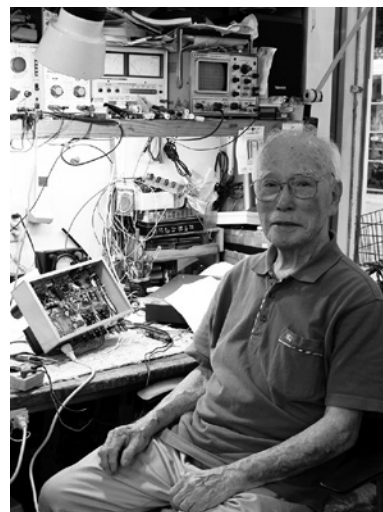
八代のみならず、日本中に森さんの電器店「ラジオクロネコ」製の真空管アンプの信奉者がいて、その森さんを村上春樹が訪ねて来るも、森さんは「あの村上春樹」と気づかず対応したというエピソードが語り草となっています。

「音響のレジェンド」として知られる森さんは技術者の顔を持つひとでありながら、哲学書を読みこなし、それは素晴らしい能の面を打ち、教養と文化の本質に生きるひとでした。何より、そのチャーミングなお人柄に惹かれる人がどれだけ多かったことでしょう。

「厚生会館の危機」は「市民文化の危機」と捉え、「最後の仕事」と「求める会」の代表に就任したのは、それはもう、毎日、厚生会館のホール再開に向けて、メンバーを叱咤激励し、全国に署名の依頼をする…。森さんの気迫が「求める会」の牽引力となりました。

厚生会館ができた当時から現在までの音響の設計をすべて把握し、図面を持ってその理論を語る技術者。2 km 以上の道のりを歩いて会議に参加し、あるときは剥いたハッサクをきれいに並べた皿の差し入れを持ってくるひと。ウィーンのアムステルダム座での鑑賞体験から厚生会館の座席を比較し、「変わらない、同じなんだ」と熱弁するひと。戦前、戦後の日本を生きたこの世代から、「『文化』が市民社会に必要な理由」を学ぶことは、今を生きる私たちには「失ったもの」ではなく、「取り返す未来」を考える機会となっています。

厚生会館を生かすことは、八代の「市民格」を向上させること。森代表逝去ののち、私たちは新たな共同代表のもと、この信念を実現させるための活動を続けます。



在りし日の森代表の姿。ラジオクロネコ店内の作業場にて(2019年撮影)



2021年12月18日開催『八代市厚生会館の凄さを知る講演会』にて。坂田道男元市長の想いや、音響の側面について熱く語られていました。

現在、ラジオクロネコの森さんのデスクには写真が飾られています。「今も気配を感じている」と息子さん。厚生会館の再開が森さんの遺志。我々の活動を見守ってくれているに違いありません。



◆八代市厚生会館を巡る主な時系列〈～2023(R5年)5月〉

2016(H28年)4月	熊本地震
5月	妙見祭関連3団体と観光ガイド協会が「伝承館」整備を陳情 → 6月議会で採択
2017(H29年)10月	経済企業委員会で厚生会館別館を解体し、伝承館を建設することが了承される
2018(H30年)1月	市がお祭りでんでん館の建設地を発表 → 厚生会館別館の解体も決定
2月	市はH30年度当初予算に「吊り天井改修設計業務委託」を計上 → 「設計業者が契約不履行」として結果的に実施せず
2019(H31年)6月	●八代市厚生会館全館が休館
7月	●別館が解体 → お祭りでんでん館の建設始まる
2020(R2年)2月	「八代市文化ホール等あり方検討委員会」設置
2021(R3年)1月	「八代市文化ホール等あり方検討委員会」が最終報告書を市長に提出
2月	八代市が政策会議で「厚生会館のホールを再開しない」と決定
5月	「広報やつしろ」で「ホールの再開中止」を公表
6月	お祭りでんでん館が完成 ●国際学術組織DOCOMOMO(ドコモモ)の日本支部が、 八代市厚生会館を「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」に認定と発表
12月	「八代市厚生会館のホール再開を求める会」発足 → 森精一氏が初代会長に就任
2022(R4年)5月	「求める会」はホール再開を求める10,374筆の署名と要望書を市に提出 市議会にも陳情書を提出
6月	市はホワイエ部分の利活用を民間公募 → 応募なし
9月	市議会で、市幹部が厚生会館について「利活用しない場合、そのまま残すことは困難」と発言 「求める会」は厚生会館の利活用案などをまとめた16ページに及ぶ提言書を市に提出 → 11月に改訂版提出
11月	市主催で「厚生会館に係る意見交換会」開催 → 市民ら約70人が参加
12月	市議会で市長が「再開しない方針に変更はない」と表明 → 公式の場で市長が厚生会館について言及するのは初めて
2023(R5年)1月	市がJ R新八代駅周辺再開発方針を発表 → 中核施設は「文化コンベンションセンター(仮称)」
3月	市議会で市幹部が「文化コンベンションセンター(仮称)」について「厚生会館の機能移転も勘案」と発言
4月	日本建築家協会熊本地域会が、ホール利活用の要望書を市に提出 八代市厚生会館閉館・将来的な解体方針の発表 → 「求める会」が抗議文提出

●時系列から見てくると ～厚生会館問題で押さえるべきポイント～



『お祭りでんでん館』の建設候補地に当初、厚生会館別館の場所は入っていませんでした。しかし、いつの間にか建設地になりました。さらに、別館には厚生会館本館の主電源設備や空調管理設備がありましたが、別館の解体後、そうした設備は移設も新設もされませんでした。つまり本館はまったく再開できない状態だったのです。しかし市は、このことを伏せたまま、「お祭りでんでん館開館時に厚生会館も再開する」と市民に伝えていました。吊り天井が改修されないでいたことも、市民には伏せられていました。

そのうえで「八代市文化ホール等あり方検討委員会」が設置され、電源設備を設置する予算も計上されない中で、再開を前提とした「まやかしの議論が続けられました。そして検討委の最終報告書からわずか約1カ月後に市が出した結論、が、「再開中止」です。

「ホール再開を求める会」は、電源設備の件など伏せられていた事実を発掘し、指摘したうえで「再開」を求めています。市は頑なな態度を取り続けています。



◆八代市の現状

■ホワイエの活用案を民間募集 → 応募なし (令和4年春)

八代市は、ホールについては「再開中止」と発表したものの、ホール以外の部分(ホワイエなど)については利活用する考えを示していました。大規模な改修を必要としないスペースである、ホワイエの活用の方策を検討することとしました。4月に民間提案の募集要領を公表し、5月末から6月末まで提案を受け付けました。しかし、電話などで数件の問い合わせはあったものの、正式な提案の申請はありませんでした。

単発イベントでの利用ではなく、年間を通した利用(3年ごとに利用契約を更新)を前提としていることや賃料を払うこと、改修はすべて自費で、しかも返却時に原状回復することなど、なかなか厳しい条件がついていました。

■「利活用しない場合、そのまま残すことは困難」 (令和4年9月)

八代市議会での一般質問で、厚生会館が現状でも「震度7に耐えられる」とされていることを元に「建物の保存はできないのか」と市議に問われ、市側は「建物を利活用しない場合、そのまま残すことは困難な状況にあると認識しております」と答弁。さらに「建物の現状を記録するための3次元測量による記録保存・調査など、貴重な建築物を後世に伝える取り組みについて今後検討してまいります」と述べました。

また、再開を求める会が提出した提言書の扱いについて、市幹部は「鏡文化センターなど現在運営しております各ホール施設、または将来的に新たな文化ホールを運営する際に参考とさせていただきたい」と発言しました。**重要なのは、この「現在運営しております各ホール施設」の中に厚生会館は含まれていないことです。**厚生会館については、「厚生会館が文化振興の拠点として多くの市民に親しまれてきた思い出のある施設であるとともに、著名な建築家による近代建築物であることから、今後、閉館という状況になった場合におきましても、市民の皆様の思いを後世につなぐような記念となる事業を実施できないか、しっかりと検討してまいりたい」と述べ、閉館後のことにまで踏み込みました。市側は、「解体」という言葉は使っていませんが、**まるで閉館・解体を前提にした事業をすぐに始めるかのような発言が相次いだわけ**です。

■「文化コンベンションセンター(仮称)を建設」 (令和5年1月)

台湾の半導体メーカー「TSMC」が菊陽町に工場を新設することから、県北を中心に各市町村がその経済波及効果を得ようと躍起になっています。その市町村競争に、八代市も「参入、することを表明しました。その中心的な事業が、JR新八代駅周辺の再開発です。そして、市が再開発の中核施設として挙げているのが「文化コンベンションセンター(仮称)」であり、「スポーツやコンサート、舞台演劇や各種講演会・展示会などが開催可能な、収容人数2,000人規模以上の多目的ホールや武道場、会議場等が複合した施設」と説明しています。施設の具体的な概要や建設地、事業費などはここ1~2年で検討する、としています。

さらに、令和5年3月の市議会で、市幹部は『文化コンベンションセンター(仮称)』について「厚生会館の機能移転も勘案」と述べました。厚生会館の後継施設、との認識を示したものです。

■「再開を求める陳情」は審議未了 (令和5年3月)

再開を求める会が令和4年11月に八代市議会に提出していた「厚生会館のホール再開と利活用を求める陳情」は、「審議未了」となりました。「審議未了」とは、一般的な言い方をすれば、「**議会での審議を打ち切ったうえで、採否も決めずに廃案とする**」ということです。審議の継続を求める市議も多かったのですが、多数を占める自民党・公明党の市議が「審議未了」を求めました。

■中村市長による記者発表「八代市厚生会館の今後の方向性について」にて、『閉館』発表 (令和5年4月)

「文化・芸術の拠点の機能は文化コンベンションセンター(仮称)へ継承」とし、厚生会館の閉鎖について発表されました。再開を求める会は同日、抗議文を提出しました。

📷 厚生会館の一般見学会に参加してきました

●2022年9月7日[水] 主催/八代市文化振興課

今からでも使用できるのではないかと、という声がかかるほど老朽化を感じさせない館内。市が提示する「改修費用20億」についての疑問は深まるばかり。



以前より要望を重ね、ようやく館内視察が実施されました。当初の予定人数を超えた参加者数となりました。



◆厚生会館がもたらす経済効果についての考察

①使いこなすと、「もっと稼げる」ホールへ！

本格的な音響で約1,000席(立見1,200席)の厚生会館は、プロの興行主がホールを借りて公演を行う「乗り込み公演」が可能な「稼げるホール」でした。厚生会館の年間維持費は5,000～7,000万円(人件費3,800万円・別館込)と言われますが、乗り込み公演などによってそのコストを回収・縮減していたのです。八代市が補助を行う自主文化事業でも、中規模ホールならではの入り数とギャラを見極めた上で、本格的な芸術文化鑑賞の機会を約1,000人の市民に与えてきた歴史があります。

今、市営のホールは鏡文化センターのみですが、500席のホールでは、乗り込み公演の見込みがなく、ランニングコストは回収できず、市の補助による自主文化事業の恩恵を受ける市民も500人どまりです。

いろいろな興行主が利活用する厚生会館だったからこそ、厚生会館はランニングコストを稼ぎながら稼働し、素晴らしい劇場文化を市民に提供し続けたのです。さらに、厚生会館は、ホール部分以外も利活用できるように作られています。殆ど使われていませんでした。ホワイエや芝生広場、ピロティを利用した落語会やコンサート、演能公演、美術展、工芸展、物産展、芸術祭など、幅広い使い方により、より多様なイベントが低予算で可能となります。県立劇場や県立美術館は「ホワイエ」で市民に気軽にコンサートを提供し、「ホール」としてのみならず、劇場文化の発信地として出張公演などのアウトリーチ事業も行っています。

②「厚生会館」だからこそ生み出せる

現代のニーズと経済効果

全国で昭和のモダニズム建築が解体の危機にある現在、厚生会館は「モダニズム建築のレジェンド」として、さらに周辺に城址、松浜軒、博物館、伝承館と江戸～令和までの建築様式を一望できる位置にあることがその希少価値を高めています。

令和元年にリニューアルオープンした「神奈川県立音楽堂」では築65周年を記念し、【前川建築見学ツアー in 音楽堂】【ヘリテージコンサート】が開催されました。もともと最高の音響効果をあげるように設計されたホールでしたが、また、建築物としての価値を同時に発信して生かしている好例です。

外観から細部にわたるまで、昭和の重厚さを残した厚生会館は、全国からの来訪者を呼び込むことが可能です。また、史跡や文化施設が集中するエリアにある厚生会館は「フェス」や「芸術祭」を展開するのに最適です。

「フェス」や「芸術祭」は単なるイベントではなく、複数の場所で同時進行する新たな価値創出の場として注目されています。参考例として、街全体を一つのテーマパークと見立てた福井市の【ワンパークフェスティバル】には、2019年には述べ1万人が訪れました。チケットの売り上げは

3,791万円でしたが、実行委員会と福井商工会議所は「6億4千万円の経済波及効果があった」と発表しました。(※1)

※参考:先駆的なブランドはなぜ「野外フェス」でファンと交流するのか?
新たな価値創出の場としてのフェス▶



③「中規模」ながら「本格的」なホールの重要性

厚生会館の最たる価値は、生音を1,000人がワンフロアで聴けるという音響の特性です。観客席の咳払いひとつが響き渡るようなホール～その一体感に惹かれて、これまでも世界から名演者が来訪し、厚生会館は「名ホール」としての名をほしいままにしてきました。

半導体で増幅した音響の、どこにでもあるような大きな多目的ホールを八代に作っても、アーティストが来たがる理由がありません。500席ではランニングコストを回収できず、2,000席以上では市民利用としても興行としても八代には持て余す。1,000人収容の素晴らしい名ホールである厚生会館こそ、八代市に最適解のホールと言えます。

④伝承館を生かす～伝承と伝統の発信

厚生会館の別館を削って開設された「伝承館」は、市内民俗文化財の保護や、継承の拠点となることを目指し、伝統文化財に関わる用具等の収蔵、展示による魅力の発信、後継者の育成、交流の促進などを目的として整備した文化施設とされています。

体験講座や展示企画など、素晴らしい内容にも関わらず、「一度も行ったことがない」と言う市民が多い現状はなぜなのでしょう? 「文化施設」との建前ながら「一過性の観光客への手取り早い対応」が前面に押し出されていることが大きな理由でしょう。「固定された飛び出す絵本」を「タッチパネルでめくらせる」、「大画面でのパフォーマンス映像」など、リピーターを想定していない「見世物」的展示物がまず目につく陳列は「一度行けば十分(あるいは一度も行く必要が無い)」というメッセージの発信につながり、本来の学びから市民を遠ざけてしまっているのです。

厚生会館の舞台には、「花道」「奈落」などが備えられ、日舞・歌舞伎から能まで、あらゆる伝統芸能の公演に対応できます。歌舞伎も能もユネスコの無形文化遺産です。松井家にゆかりの深い能や狂言では「足拍子」と言う、足の響きによる感情表現が重要視され、古来、能舞台の床下には甕(かめ)を据えて足拍子の音を良くする工夫を施しているほどです。厚生会館は奈落がその甕の役割を果たし、これまでも「道成寺」などの大演目の公演を実現させてきています。歌舞伎の公演に欠かせない「花道」、客席の間近で役者の一挙手一投足を眺めるのは、間違いなく観劇の醍醐味のひとつであり、城下町文化の

中心部のホールで、八代市民は子どもの頃からこのような伝統芸能鑑賞を体験してきました。厚生会館の特性と伝承館をセットにすることで、日本文化や八代の伝統・伝承を市民から海外の観光客までを対象に発信できるのです。

⑤城下町ブランドの象徴として

八代市には、一国二城として築城を許された八代城址を核にした「城下町文化」があります。城下町の豪商が寄進して始まったのが妙見祭で、各町内に出し物の収納庫があり、その伝承を繋いできたのは周知のとおりです。

その城址と対峙する重厚なデザインの厚生会館は、外堀の石垣が削られて（※2）コンパクトになった現在の城址を拡大する形で、城址の景観を補い支えてきました。

未来の森ミュージアムも、伝承館も現代の名建築ではありますが、その素材、佇まいの重厚さはとても厚生会館には及ばず、あの一角から厚生会館を削ると、城址がますます小さく見え、一体の歴史の厚み、重みが薄っぺらなものになり、八代市は城下町文化の顔と言わべきエリアに、大きな穴を空けてしまうことになります。「城下町ブランド＝歴史と文化を継承してきたまち」をひと目で説

明できるエリアを損なうことは、八代市全体のブランディングに取り返しのつかない損失を与えます。

「城下町の核」の景観を支える厚生会館を残し、八代の伝統を受け継ぐという気概を発信していくことこそ、「城下町八代」＝「八代市全体」のブランディングとなります。

⑥“教養”はパスポート

～世界に通用する人材の育成～

本格的な芸術文化に通暁した、教養のある人材を育成することは、世界に通用する人材の育成に繋がります。「本物の劇場文化」「地域への愛着とプライド」を経験として語れる八代出身のセールスマンは、世界中で教養豊かな顧客相手にセールストークを展開できるでしょう。

九州の一地方において、本質的な文化を知らずに育つことは、八代の子供達にとって、大きなハンディキャップになります。しかし、文化の本質を経験する人材を育てることは、例えば、「桂離宮の八代表」「吉祥文化と晩白柚」「干拓の歴史と塩トマト」を語り、「高い八代」をセールスできる人材の育成に繋がり、ひいては八代市全体のブランディングを成功に導きます。

※1…特徴ある箱には全国から観客が訪れる例として、2022年暮れに八代市街地の老舗『キャバレーニュー白馬』で行われたライブがあります。ロック歌手・坂本慎太郎の新アルバムリリースツアーとして、日程発表後、特にSNS等で話題になっていたのが、日本に現存する唯一のキャバレーである『白馬』での公演でした。

ネットで購入された250枚のチケットは即完売、スタッフを含めた約300人が参加し、200人ほどが九州外からの参加で、多くは市内に宿泊し、市内の飲食店などを利用しています。さらに、スタッフ総勢30名、16mmフィルムカメラ6台で撮影した、タイムスリップしたかのような現役キャバレー会場の雰囲気演奏を記録した貴重なライブ映像が完成。その上映会が東京のライブハウスで1日2公演で開催される予定です。

※2…**八代城址トリビア** 明治時代、八代市は城址の外堀部分の石垣をセメント会社に売って削ってしまっているのです！昭和10年頃には残る城址も削って更地にしようという市の動きに対して、「城址を喪ってはならない」と投稿して警鐘を鳴らした市民のおかげで、今の城址が残っています。

厚生会館を改修しながら再開した場合と、解体して新しい大ホールを新設した場合の比較イメージ



令和4年11月に開催された「八代市厚生会館の現状説明及び意見交換会」にて当会より発表・提出した「厚生会館の利活用についての提言書」では、厚生会館のもたらす経済効果をはじめ、【八代オリジナルの新たな市民文化の創造】として、厚生会館を核とした9項目について詳細に提案しています。

◆「厚生会館のホール再開を求める会」活動報告

勉強会

●第1回「八代市厚生会館の凄さを知る講演会」

2021年12月18日(土) @お祭りでんでん館

●第2回 新春特別学習会「厚生会館を学ぶ 厚生会館から学ぶ」

2022年1月10日(月・祝) @珈琲店ミック

八代市役所(文化振興課)との協議

●2021年

12月16日➡ 八代市文化振興課による経過報告

12月28日➡ 上記経過報告で未確認事項について協議

●2022年

3月2日➡ 熊日「アングル2022」に厚生会館問題についての記事掲載

4月8日➡ 八代市文化協会執行部による厚生会館内視察実施

4月20日➡ 八代市文化振興課にて(岩崎部長・丸山課長)意見交換
※高専・森山先生のプレゼンヒヤリングについての提案

●2022年

5月17日➡ ホール再開要望書(市長宛て)・陳情書(市議会宛て)・車両移動
及び視察の要望書及び第1回目署名10,374筆提出

6月22日➡ 市議会・経済企業常任委員会にて上記陳情書の審議→審議継続

9月7日➡ 八代市文化振興課による厚生会館の一般見学会

9月21日➡ 第1回厚生会館ホール再開を求める提言書提出
(市長、市議、文化振興課宛て)

11月14日➡ 『八代市厚生会館の現状説明及び意見交換会』開催
提言書のバージョンアップ版配布

11月25日➡ 「八代市厚生会館のホール再開と利活用についての陳情書」提出
(市議長宛て)→審議未了

●2023年

4月27日➡ 中村市長より「八代市厚生会館の閉館について」発表
同日、求める会より抗議文を提出



▲第1回講演会ポスター



▲第2回新春特別学習会ポスター

その他の活動

●2021年

11月➡ やつしろぶれす《シリーズ八代大好き!》にて
「厚生会館の魅力を語る」スタート

●2022年

2月2日➡ 日本フィルハーモニー交響楽団への厚生会館
現状報告及び再開協力依頼

2月3日➡ 八代商工会議所へ署名活動協力依頼

●2023年

3月11日➡ 杉孝子氏寄稿文 熊日3/11号掲載

会計報告 (2022年3月3日~2023年4月16日時点)

●募金	37,203円
●繰り越し金	67,451円
●収入合計	104,654円
○支出	
・再開を求める会通信Vol.1 印刷費	7,670円
・署名用バインダー	554円
・署名用紙追加 印刷	5,900円
・資料コピー・封筒代	10,000円
・萩原会館会議会場使用料	3,000円
○支出合計	27,124円
◎残高	77,530円

壊さないで!! “八代の至宝”八代市厚生会館【緊急シンポジウム】
～語ろう! 市民の想いと建築家による「まだまだ使える」視点～

開催決定!!!

●日 程／令和5年 6月11日[日] 14時~16時

●会 場／八代市民俗伝統芸能伝承館『お祭りでんでん館』会議室

●参加費／無 料 ※事前申込みが必要です

●申込先／080-2747-1838(笠井)

内 容

■建築家の視点から

建築の専門家による、厚生会館の価値や保存事例など

■市民の想いを語ろう

厚生会館存続への市民の熱い思いを語り合います

LINE公式アカウントが
できました!



当会より活動の進捗等の情報を発信します。ぜひ登録ください。

『八代市厚生会館のホール再開を求める会』通信
vol.02

2023年5月15日発行

八代市厚生会館のホール再開を求める会
お問合せ／080-2747-1838
hallsaikai@gmail.com